葵の祈祷所

紀伊徳川家と高尾山 ⑨

明治大学博物館　外山　徹

享保期における寺勢興隆

紀州家との交渉に関わる由緒書に記された享保三年（一七一八）の放生会については、その執行が幕府の鷹匠によって担われていたことが判明し、紀州家との関わりについてははっきりしなかった。あらためて、宗直時代の交渉について考察してみよう。

寛政二年の由緒書

宗直代における交渉が具体的に述べられた記事は、寛政二年（一七九〇）の由緒書が最も古い。

一、紀州様御代々御祈祷仰せ付けられ、わけて宗直卿代度々御祈祷仰せ付けなされそうろう所、三ヶ年御祈祷あい勤めそうろうにつき、修復料として金二百五十両下し置かれ、その節の御用御懸り佐野伊左衛門殿にてござそうろう事

紀州家と薬王院の関わりは宗直の代から記され、祈祷依頼が三ヶ年に及んだとするが、この記事とて七〇年余り後のものであり、その信憑性についてはもちろん検討の余地がある。もう一文に、

一、宗直卿御代、不動尊一体御寄附あそばされそうろう、根来山興教大師の御作にて当時長日護摩供本尊に安置つかまつりそうろう

とあり、これは前号の天保七年（一八三六）の由緒書にもあった木像のことで、幕末の記事では旧護摩堂（現奥之院不動堂）に安置されていたとするものである。この不動尊について『新編武蔵風土記稿』（文政五年・一八二二多磨郡之部上梓）には智証大師の作とあり、記事に齟齬を来している。智証大師は平安初期の天台僧、三井寺中興の円珍。どのような経緯で出た説か、信憑性があまりに低いが、宗直寄進の伝もよく知られた事柄ではなかった感がある。由緒書が「わけて宗直卿代度々」とするのは、宗直が支藩から入った寛政当時の紀州家家系の祖であり、その事績として強調する意図かもしれない。それでは、これらの記事は後世の作為によるものなのだろうか？

記事の信憑性を測る上で注目すべきは、佐野伊左衛門という人物の名が出ていることである。紀州家側の担当者とされる人物だが、文化七年（一八一〇）「御家中官録人名」に「寄合」として佐野伊左衛門の名が見える。その記事中に「父伊左衛門」とあり、世襲名であることがわかる。佐野家は禄高二〇〇〇石と大身で、幕末の当主は御勝手掛を務めていたが、父祖が同じ役にあった可能性もある。

薬王院文書の中には、佐野伊左衛門名義の書状が二通残っている。祈祷依頼や不動尊像寄進を具体的に裏付けるものではないが、一通はかつて寄附した葵紋付の戸帳・水引の再度の寄附を引き受ける内容なので、佐野が個人的に関係を持っていた書状ではなく、紀州家側の窓口として応対した形となる。よって、紀州家として薬王院と関わりを持っていたことは確実視できる。

江戸後期には宗直寄進の伝のあった不動尊像

享保期における動向

宗直代に関わる一次史料に事欠くということであれば、当時の高尾山の動向を振り返る中で謎解きをしてゆかねばならない。享保という時代は、実際、高尾山にとっては躍進の時期であった。

吉宗の将軍就任の御礼に参列し、放生会執行時の住持であった一四世秀永は享保八年（一七二三）に入寂。その後を承けた一五世賢秀の山主在任は一年に満たず、一六世秀憲が晋山する。秀憲は八王子千人同心志村又右衛門の子と伝えられるが、享保後半における躍進はこの秀憲の事績である。秀憲は宝暦三年（一七五三）の隠居後は湛玄を名乗り、八代藩主重倫から篤い帰依を受けることになる。

秀憲の事績の中でも特筆されるべきは、現存の飯縄権現堂（当時は飯縄権現社）の建立である。その経緯は、棟札とともに地先上椚田村旧家の日記にも裏付けられる。それによると、享保一一年十一月一〇日は秀憲晋山から二年が経った頃だが、「この日高尾山に名主・組頭衆へ振る舞いあり」とある。村役人が呼び集められた理由は、同月二四日の記事「大光寺にて高尾より椚田中酒振る舞われ申しそうろう、飯縄様御宮建立なり」によって明らかになる。わざわざ村人に近いところまで赴き、全ての村人に対し振る舞いをして飯縄宮建立の披露をするということは、もちろん種々協力を依頼する意図があったにしろ、それだけの大きな事業に成算を得ていたからこそであろう。

一四年一〇月八日、上棟祝いがおこなわれ日記の主も村人とともに呼ばれている。この祝賀の席は三日間にわたって設けられた。現在の飯縄権現堂は度々の修築が入った姿であるが、享保一五年に幣殿・拝殿が併設され、今に続く権現造りという様式の基礎が整った。秀憲は後に寛延縁起をまとめる際には本尊として飯縄大権現の祭祀を強調しており、それを考えると、この時の再建の規模は、薬師堂を超える山内でも最大規模の建築とすることを十分意図していたものと考えられる。

その後、一六年二月晦日から居開帳が実施されるが、飯縄宮の遷宮開帳ということだろう。「おびただしき高尾参詣にござそうろう」「さてさてこの日など開帳盛り申しそうろう」と旧家の日記に記される。そして二一年に再度居開帳を執行。両度の居開帳に手応えを得たか、元文三年（一七三八）にはいよいよ初の江戸出開帳となる。この本所大徳院大仏勧化所でおこなわれた出開帳は江戸鎌倉河岸の講中が世話人を務めているが、江戸からの参詣者の増加が背景にあるはずだ。

秀憲に対する人望

ここで問題となるのは、壮麗な飯縄宮を整備し得た経済的な裏付けである。どの程度の費用を要したかは不明だが、相応の大檀越の存在を抜きにはできない話だろう。やはりその背景には紀州家からのバックアップがあったのではないか？

そこで考えたのが、山主秀憲のパーソナリティである。実は、後の八代重倫は現住秀興ではなく、度々隠居湛玄（秀憲）を指名して祈祷を所望している。重倫代については同時代の史料が大量にある。重倫が初めて高尾山に帰依を示したとすれば、それは山主秀興に向けられてしかるべきである。この事は、秀憲が紀州家との関わりにおいて、なみなみならぬ人望を得ていたことを示している。そして、重倫の帰依もまた秀憲を知る誰かの感化を受けたものと考えられる。そうすると、やはり秀憲こそが紀州家との交渉の当事者であり、享保期における盛んな動向の背景として紀州家との関わりが推測されるのである。

さて、この間の高尾山信仰の伸長は『永代日護摩家名記』という護摩祈祷檀家帳からもわかる。護摩檀家の発生は元禄一七年（一七〇四）からしばらく江戸が中心であり、宝永七年（一七一〇）から享保前半までの一五年間は八王子宿での檀家発生が目立った。飯縄宮竣工以降は地先村々や現在の八王子市域の村々での檀家が増加傾向となり、信仰圏の着実な拡張が看て取れる。これは、延享三年（一七四六）以降一八世紀後半にかけての北方の飯能周辺や東の多摩川の沿岸部への檀家圏のさらなる拡張の前段階であった。

《参考文献》相原悦夫『高尾山薬王院』（百水社、二〇〇〇）

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。